

パネルディスカッション
『美しい地球をまもるのは私たちのことです』

講演について、パネルディスカッションをおこないました。1時間足らずの短い時間でしたが、日頃、環境について思うことを話し合っていました。

コーディネーター
パネリスト
山口 務氏 (RITE専務理事)
瀧 静子氏 (京都商工会議所婦人会理事)
一瀬 裕子氏 (京都府商工会婦人部幹事)
ナターリヤ・レペチュク氏 (京都府国際交流員)

瀧氏：昨年秋に、京都府女性海外研修団の一員として、北欧4カ国、デンマーク、ノルウェー、スウェーデン、フィンランドを2週間かけて訪問してきました。まず街にはあちこち市電が走り、その道路を自動車も利用しています。通勤や通学は自転車利用が多く、自転車道路が設けられ、自転車のリースがあちこちあって、コインを入れると自転車のロックがはずれて、目的地まで使用。そこで返却するとコインが戻る仕組みになっており、気軽に利用できます。自動車は信号待ちで3台目以降はエンジンを停止させなければなりません。自動販売機はなく、飲物は殆どビンで、1本のビンを30回再利用し返却するとビン代が戻ります。マーケットのビニール袋は有料、野菜なども欲しいだけのバラ買いで一つ一つパックがされていません。又、ごみ税が採用されており、街角や至る所に大きな色とりどりのデザイン的にも格好のよいBoxがあり、各個人が色によってごみの種類を分けて捨てるようになってきています。生ごみを焼却してこの熱を地域暖房に利用しているの、光熱費がかなり安く、暖炉は部屋の飾りで煙りも出ていません。

こういった環境保全に国を挙げて小さいことから取り組んでいることに感銘を受けました。日本ほど便利な国はないのではと思いますが、環境破壊をこれ以上しない方策、それを本当に心してやっていかなければならないと思って帰ってまいりました。

一瀬氏：私は北山杉のたくさんある京北町にいます。13年前からペンションを開業しています。私も山の中が大好きですし、お客様にも自然の好きな方たちが寄ってこられます。山で出会った時の「こんにちは」の挨拶、あれ不思議ですね。山の中やというだけで心が開かれて本音で語れる。ドンドン本音のお付き合いができるんです。四季折々の花が咲き、きれいな川、北山杉の林、本当にすてきな環境にすんでおります。その美しい自然環境を少しでも守ろうと私の組織もリサイクル運動(廃油石けん作り、EM菌使用の有機肥料づくり、生ごみの減量化、牛乳パック回収など)をしています。しかし興味関心のある人20%程だけがクルクル舞いをしているだけで、後の80%は「何も知らん」というのが現状です。

この京都会議の問題を多くの人に知ってもらおうと、組織同士が横に手をつなぎ同じ目標にむかって皆で前進していきたいという思いがメキメキと心の中で芽生えています。

私、今日のために勇気を出して京北町長さんに「横のつながりのネットワークづくりの支援」をしてもらいたいとお会いしました。でも女性組織のそういった必要性

は十分に理解してもらえませんでした。とにかく行動することで一歩前進したと思っております。今後、町を中心に関心度をどう高めていくかが私の課題との思いです。

ナターリヤ氏：私はウクライナで起こり世界中の皆さんの問題となったチェルノブイリ事故について話します。1986年4月26日、ウクライナ共和国でチェルノブイリ原子力発電所で史上最悪の事故が起こりました。暴走した核反応のために、原子力発電所にある4つのうちの1つの原子炉が吹っ飛んで、大量の放射線物質が大気中に飛び散り、旧ソ連共和国だけでなく、2000km離れたヨーロッパにも放射線物質が降り、ウクライナでは300万人以上が被災、発電所から3km以内の地域は今でも立入禁止区域となっています。

現場では、大勢の作業員や死者が高いレベルの放射線を浴びて犠牲者は3万人以上、生き残った作業員の多くは目の機能が段々低下、チェルノブイリエイズと呼ばれる重い病気に悩まされています。汚染区域にいた子どもたちも成長が遅く重い病気に悩まされています。甲状腺がんの発生率が10倍高くなり、ストレス性や神経精神的な障害も15倍に増えてきました。1997年だけでチェルノブイリ事故の因果関係がみられた病気で死亡した人は16,000人です。

ウクライナ政府は2000年までチェルノブイリ発電所を閉鎖と発表していますが、発電所の解体や他の発電所の安全性の向上などまだ問題となっています。

CO₂を発生しない原子力発電所は今のところ不可欠なことです。操作を厳重にしながら国民の安全性を確保すべきだと思います。

環境問題に対しての提言 (山口先生より)

- 京都会議の後での主役は紛れもなく行動する消費者、地域の方々であり、行政はそれをバックアップし支援していく。
- 行政が動かないと出来ないことは問題提起して運動の輪を広げ、地域協力を大切にする。
- 一人で何歩も進むよりもみんなで一歩を進めることの方が効果は大きい。
- 私たち自身が自らの知恵と友情によって人の輪を連帯の輪を広げることによって力強い運動になる。

地球のために、私たち自身のために“地球を守るのは私たちの心です。”

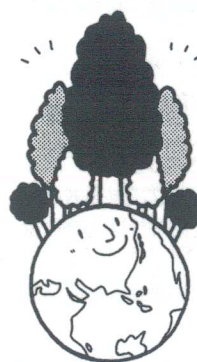
◆ 私たちの決意 ◆

瀧氏：ついこの間は日本は世界一の経済大国といわれ、今や世界一のダイオキシン大国といわれています。私たちはこの10年間特にせいたくをしてきたように思います。一人ひとりが認識を持ち毎日生活することが大切です。

地球があつてこそ私たちです。
健康があつての幸せです。
できる限り節約をしましょう。
身近な人たちにこの実態を話しましょう。

一瀬氏：永平寺の管長さんの「山は心身なり…」という言葉が踏まえて、皆さんで自由に考えていければいいと思うんです。環境問題に対して力をつけていこう、何でも見聞きしよう。それを一人でも多くの人に話していこう。これを私の環境問題に対する取り組みのモットーにしていきたいと思っております。

ナターリヤ氏：ウクライナは今非常に不景気な状態です。誰もごみを捨てる前に分けようと思いません。ごみは全部同じところに捨ててリサイクル制度などは一切ありません。日本に来て本当にびっくりしましたが、今はかなり慣れて、協力しようと思つています。

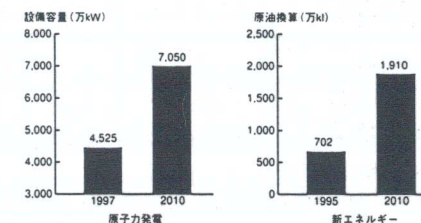


どう減らすCO₂

我が国のCO₂排出量は、95年時点で既に90年と比べて8.3%伸びており、このまま放置すれば2010年には90年と比べて20%もの増加が見込まれます。このため、今こそ、エネルギーの供給と需要の両面からのこれまでにない思い切った対策が求められています。

エネルギー供給面での対策

CO₂を発生しない原子力発電を国民の理解と安全性の確保を大前提として今から約20基増やすことが必要です。また、同じくCO₂を発生しない太陽光発電等の新エネルギーを現状の約3倍に増やすことが必要です。



エネルギー需要面での対策～省エネルギー対策

家庭、オフィス、工場、交通、物流などあらゆる面で徹底した省エネルギーが必要です。そのための対策は、経済や国民生活への大幅な影響が生じないように配慮しながら、各界各層が一体となってギリギリの取組を実践していくといった大変厳しい内容のものです。

家庭では

いくら製品や住宅の省エネルギー化を進めても、その使い方が今のままではエネルギー消費の伸びを抑えることができません。私たち一人一人の取組が必要です。

- 冷房温度を28度以上に引き上げましょう。
- 暖房温度を20度以下に引き下げましょう。
- 給湯温度を引き下げましょう。
- 不要なテレビ、エアコン、シャワーの使用時間を短縮しましょう。
- 照明、電気器具などのこまめなスイッチオフに努めましょう。
- 白熱電球から蛍光灯への付け替えを進めましょう。
- 冷蔵庫、お風呂、洗濯機、電気こたつなどを効率的に使いましょう。
- 短距離の自動車利用を徒歩や自転車に変えるなど、自動車を使わないで済むような工夫をしましょう。
- 駐車時のアイドリングをやめましょう。

